

## 学校図書館の活用充実を柱にした学校運営

東大阪市立若江小学校  
校長 野々村 礼二

### 1 課題

昨今、子どもたちの活字離れがはなはだしい。新聞を購読している家庭の割合は全国でわずか3割弱だそう。今の子どもたちは、紙の書籍を手にとってじっくり読む時間よりも、おそらく圧倒的にタブレットやスマホで動画鑑賞する時間の方が長いのが現実だろう。

本校の昨年度（R5年度）の児童の1ヶ月あたりの平均学校図書館貸出冊数はわずか0.9冊である。なんと1冊にも満たない。子どもたちの読書量を増やすにはどうしたらいいだろう？昨年度の年度末反省会議で、全教職員で話し合わせ、R6年度は学校総体で読書活動に取り組み、その実践を学校運営の柱に据えようと考えた。

ところで、北海道の国語科教員である石川晋氏はその著書「教室読み聞かせ読書活動38」※のなかで、子どもたちの読書活動推進によって期待できる効果として、次の9点を挙げている。

- ①（子どもの）自己肯定感を高める
- ②（子どもも教師も読書そのものを）楽しむ
- ③（子どもたちが）知識を得る
- ④（子どもたちの）人間同士のつながりを深める
- ⑤（子どもの）読書意欲を高める
- ⑥（子どもの）基礎学力をつける
- ⑦（教師の）力量向上につながる
- ⑧（子どもたちの）関係性の修復を図ることができる
- ⑨（子どもが）自己の物語を獲得できる



本校の図書館の様子

本校の実践が9つの効果のうち幾つに繋がるのか、働き方改革を意識し過重労働にならないよう配慮しながら「学校全体で無理のない範囲で、楽しみながら実践を進めよう！」と、全教職員にうったえた。

まずは、本校の現状の調査を始めた。そもそもR5年度末の学校図書館の蔵書数は9561冊、児童1人あたり19.1冊である。これは文科省の定める「学校図書館図書標準冊数」にほど遠い数字である。

また、学校図書館の開館日は週に1日のみ。本市は、司書教諭が週に1日しか配置されていないのである。このままでは学校図書館の貸し出し数の増加は到底のぞめない。「まずは図書館を毎日開館したい」私は、職員会議で、強く教職員にうったえた。

併せて、本校の全国学力学習状況調査の国語の平均正答率は、本校は全国平均はおろか、大阪府平均や東大阪市の平均よりも大きく下回っている。子どもたちの読書量の増加による学力向上も、目標のひとつに掲げた。

そしてこれらの目標達成のための方針として「子どもが本を読みたくなる2つのしかけを作ろう！」とした。

まず1つ目は、本市の子どもたちのタブレットで読める「東大阪電子図書館」の読み放題パックの積極的な活用を推奨した。というのも学校図書館の蔵書で人気のある書籍はたいてい貸出中で、返却



東大阪市電子図書館のトップ画面

予約待ちであることが多い。しかし、読み放題パックなら友達と同時に何人でも一緒に読めるし、読後の感想を交流することもできる。蔵書の少ない本校にとって、これを利用しない手はないと考えた。

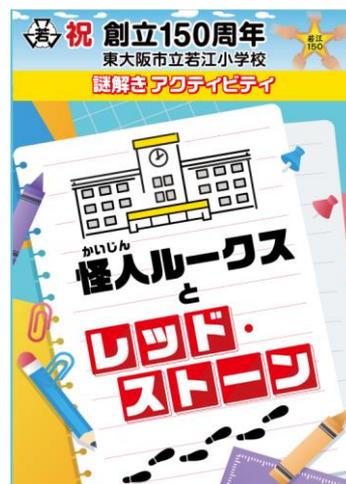
さらに、読み放題パックの本の中から読書クイズを Kahoot! (カフト) で作成し、毎月替わりで本校の学校 HP に「今月のカフト」のコーナーに掲載した。カフトの読書クイズで優勝しようと、毎月たくさんの子が電子書籍を読み、クイズに挑戦してくれた。

次に2つ目として、子どもたちが本を読みたくなるようなイベント等を企画した。

本校は今年、創立 150 周年を迎える。その式典のイベントの1つで「怪人ルークスとレッドストーン」という謎解きイベントを実施し、開催日の前に、謎解き関連の書籍を約 30 冊追加購入し、図書室に「謎解き本のコーナー」を目立つように新設し子どもたちに宣伝した。

イベント当日は、子どもたちと一緒に保護者や地域の方々も参加され、学校内を散策しながら「謎解き」を楽しんでもらった。もちろん、子どもたちが保護者と学校内を歩き回りながら謎を解くとき、すでに謎解き本を多く読んで鍛えた子どもたちは、大人よりも先に、謎を解き明かし次へ次へと進んでいったのはいうまでもない。本イベントでは、謎解き問題の製作者である株式会社エフェックスの宮川社長も名古屋から見学に来られ、子どもたちの意欲的な様子に感動されていた。

しかし、先立つものは、ヒト・モノ・カネである。そこで本校は昨年度末に、大阪府教育庁の「学校図書館の充実・活用に向けたモデル校事業」と、Panasonic 教育財団の「実践研究助成」と、関西みらい教育財団の「図書購入助成金」に応募したところ、なんと3つとも当選することができた。これによって、蔵書数の少ない紙の書籍購入の費用や電子書籍の研究費も獲得できたし、図書館司書の毎日配置も実現した。さあ、これで実践の準備が整った、ここからが校長の腕の見せ所である。



謎解きイベントのポスター

## 2 実践報告

### (1) 実践のねらい

今回の実践の主な活動内容は、年間を通して子どもたちに「紙の本」と「電子書籍」の両方の読書を全学級で奨励したことである。

これは、子どもの読書量を増やすために、紙の本も電子書籍も両方の読書量が増えることで、相乗効果で読書量が増えることを狙っている。

### (2) 実践の内容

まず4月当初に、全教職員で本年度の重点目標として「学校図書館を充実活用する授業づくり」を確認した。

また学校 HP で Kahoot! (カフト) を使った電子書籍用見放題パックの本のクイズを、毎月替わりで発信した。と言うのも、これまで私はカフトについては GIGA スクール構想での子ども 1 人に 1 台のタブレット配付が始まったと同時にスタートさせた実績がある。今までにも算数や国語、特別活動などで全学級で先進的に進めてきた経緯があるので、その勢いを借りて「東大阪電子図書館読み放題パック」の本もカフトでクイズ作成したところ、子どもと保護者が家庭で一緒にクイズを楽し

むなど、大きな反響があった。

また校内研究授業についても、5月に4年生で虫の図鑑を活用した研究授業を実施し、6月にも1,3,5年生で図書館を活用した授業を実践した。図書館から借りた本を読み、グループでまとめたり発表したりした。授業のしめくりには、カフトのクイズを行ったクラスもあった。

さらにこの校内研究授業のまとめには、いつも市教委の図書館教育担当の指導主事から助言をいただき、実践の方向性を示唆いただいた。

また夏休みには、奈良佐保短期大学の上出吉則教授に來校いただきプログラミングを通して言語能力育成の研修や、大阪商業大学の初谷勇教授を招いての生涯教育としての読書活動についての研修を実施した。



校長自らがカフトを使った授業を実践



公開授業の案内チラシ

続いて2学期も、10月に6年生で図書館を使った研究授業を実施し、11月27日(水)には、全学年で図書館を活用した府内教職員向けの公開授業を実施した。

3学期には今年の研究成果をまとめた成果報告書を作成する。もちろん、R7年度も本実践を継続する予定である。

本実践のねらいの1つに「児童の学力向上」がある。その学力のものさしの1つである全国学テの平均正答率で、何とか今回の読書活動の推進で、好ましい結果を残したいと思う。まずは、本校の平均正答率が東大阪市の平均を上回り、続いて大阪府平均や全国平均を上回りたい、と考えている。

今回の取り組みを進めていくうちに「子どもたちが教室の内外で本に親しむ風景が日常的に見られるようになった!」と感じることがしばしばあった。

また、実践当初は「図書館の蔵書数が少ない分、電子書籍の読み放題パックで読める本を増やせば、子どもの読書量は増えるだろう」と安易に考えていた。しかし5月にPanasonic教育財団の主催するセミナーに出席した際、同じように電子書籍の読み放題パックの活用促進に取り組んでいる名張市立梅が丘小学校の宮部 優先生らと同じグループで実践交流をしたりするなかで、指導助言に来ていただいた放送大学の佐藤幸江教授から「ただ読める本が増えただけでは、簡単に読書量が増加するわけではない」との指摘があり、目から鱗が落ちた思いがした。その後も「子どもたちが本を読みたくなくなる様々なしかけについては、名張市立梅が丘小とは交流を続けている。

ちなみにこれまで本校の「朝の読書」の時間は、紙の書籍が中心であったが、電子図書館の奨励を始めてからは自分のタブレットで電子書籍を読む子どもも増えてきた。特に「電子書籍読み放題パック」は、いつでも、何人でも、同じ本が読めるため、クラス全員で一斉に読む場面もあった。

また教員がKahoot! (カフト) の「割り当て」として毎月代わりで東大阪電子図書館の読み放題パックの本から出題したクイズは、全学年で(保護者も巻き込んで)意欲的に取り組んでいた。学校HPのアクセス数も右肩上がりになった。



本校の「朝の読書」風景



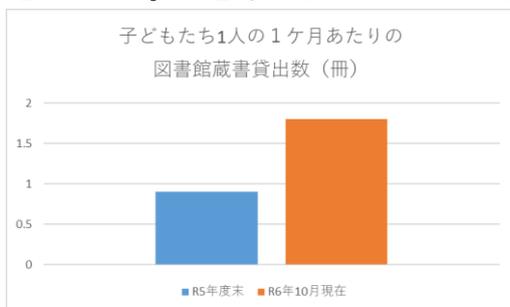
謎解き本の特設コーナー

さらに、本年度の本校の創立 150 周年記念イベントのひとつとして企画した「怪人ルークスとレッドストーン」の開催については、実施前に図書室に「謎解きの本の特設コーナー」を設置すると、子どもたちは大喜びで謎解きの本を借りて読んでいた。イベント終了後も本を借りに来る子や、貸出予約中を待ちきれずに電子書籍で謎解きの本を読む子もいた。まさに紙の本と電子書籍の相乗効果で子どもたちの読書量が増えていった。

本年度の図書館を活用した研究授業では教育財団からの助成金もあり、校内研究授業でも全市向けの公開授業でも、市教委や府教委の指導主事だけでなく、大学の学識経験者からも指導助言をいただくことができた。もちろんこれらは、教員の授業力向上に効果があったのはいうまでもない。

### 3 評価と結論

実践を進めるなかで、子どもたちに変化が見られてきた。まずは、子どもたちの読書量は確実に増えていった。子どもたちの1ヶ月あたりの貸し出し数はR6年度10月末現在で、紙の本だけでも1.8冊（前年度比2倍）である。年度末にも、おそらく前年度の2倍近い冊数になるものと予想できる。



子どもたちの読書量は約2倍に増加！

次に、子どものタブレット活用が進んだ。本市ではドリル教材としてのQubena(キュビナ)がタブレットにインストールされているが、加えてKahoot!(カフト)を使った読書クイズに取り組んでいくうちに、算数や国語でキュビナだけでなくカフトの問題にも取り組む子どもが増えてきた。

さらに、生徒指導事象が激減した。学校内外で本に親しむ習慣がつきはじめると、学校全体が落ち着いた雰囲気になり、前年度まで起こっていたいじめや不登校、子ども間の暴力行為、校内の器物損壊などの生徒指導事象が減少してきた。子どもたちの情緒の安定に読書活動は大いに効果があったと実感している。

加えて、文頭にあげた読書活動推進によって期待できる9つの効果のうち、②読書を楽しむ、④つなかりを深める、⑤読書意欲を高める、の3点については確かな手応えを感じている。

本実践はまだまだ序盤のため、学力面での大きな成果が見られるまでには至っていないが、次年度以降は必ずや学力面でも、よい数値が得られるものと教職員全員が確信している。

### 4 今後の課題

今回の実践は、大阪府の研究指定や各種団体の助成金を得られたため、人的・経済的な支援に恵まれ、よりスムーズに進めることができた。

しかし次年度以降も、同様の支援が獲得できるかどうかはわからないが、それでも全教職員で力を合わせて、図書館の毎日開館と読書（紙の本も電子書籍も）の奨励を続けていこうと思っている。

自分は、すでに還暦過ぎの老兵ではあるが今後も、少しでも若い先生方のやる気を伸ばせるような学校運営を探っていきたいと思う。

今回、このような実践をまとめる機会を与えていただいた「公益財団法人 日本教育会」の事務局の皆様方に深く感謝し、本稿を終えたい。

[参考文献] 「教室読み聞かせ読書活動アイデア 38」2013、明治図書、石川晋著